

絵画表現の基礎 TEXT

■ 授業の目標 デジタル表現にとりくむ以前の基礎理解として、「絵画」ジャンルの多様性を理解する。

	日付	授業テーマ	ノート	宿題
1		絵画の基礎（感情・造形用語）	○	VTRレポート（感想文）
2		肖像	○	//
3		自然主義	○	//
4		象徴的表現	○	//
5		へたうま	○	//
6		POPアートとは？	○	
7		抽象アート入門	○	
8		基礎平面	○	
9		美的形式原理	○	
10		視的要素	無	分析レポート

到達目標

- (1) 絵画内容の多様性を知る
- (2) 感想文が書ける
- (3) 造形分析の基本が理解できる
- (4) メモ・ノート取りを工夫できる

提出物＝授業開始時

- ノート A4：2ページ、綴じない
- VTRレポート 各350～500字
A4：1～2ページ、綴じない

成績評価

欠席2回まで、ノート・感想文・レポートの提出内容による。
標準的＝C（70%）、よく頑張った＝B（30%）、ものすごく頑張った＝A

オフィス・アワー 水曜日、16：20～17時、アートファクトリーA棟2F新井研究室

参照VTR



01-1ゴッホひまわり
54



01-2ゴッホ死116



02-1モナリザBK58



02-2ルネサンスの
巨匠レオナルド153



03-1プラドMウエラス
ケス88



03-2等白を見る
135



04-1アングル65



04-2ダビッド70



05-2ミロ159



05-2ルソー117



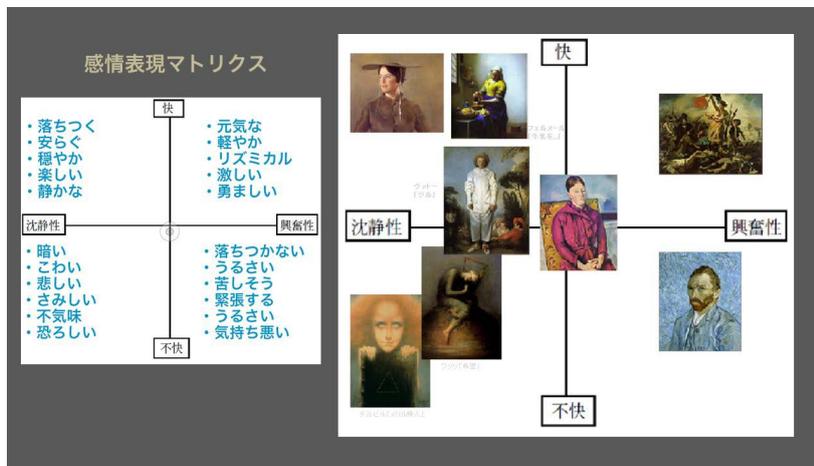
05-3キリコ67

1. 絵画表現の基礎



・論文・報道記事
感情的要素なし
伝達性

・小説
情緒性 微妙な感情
↓
特殊な雰囲気
内的情動(鑑賞者にとって)
急速にひき起こされる感情
怒り・恐れ・喜び・悲しみといった意識状態



画面の表面

① (図) 視的要素	フォルム・色彩効果	造形性
	空間設定	造形性
② 美的形式原理	シンメトリ・コントラスト・リズム	造形性
	統一・調和・バランス	造形性
③ (地) 基礎平面	心理バランスの構造図	造形性

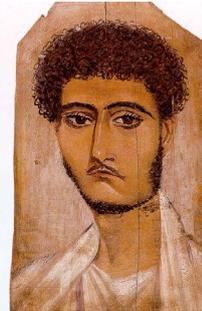
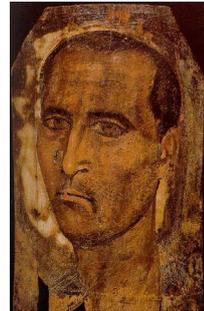
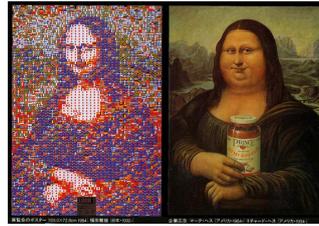
① (図) 視的要素	フォルム	具象的形態 (人・物)、記号的、抽象的 幾何学的形態、点・線 デフォルメ、グッチ、ぼかし、透視 方向、緊張、力動性
	色彩効果	明暗、陰影、調子 (トーン) 色、透明 輪廓近法、乗行 深い空間、平面化 平面、平坦 地平面
	空間設定	
② 美的形式原理	シンメトリ	対称、相称、中心軸、重力的な均衡
	コントラスト	対比、大小、強弱、鮮明
	リズム	規則、連続、繰り返し、変化 融合、全体、全体、部分、分離 調和・バランス 秩序、均衡
③ (地) 画面心理	基礎平面	水平垂直、上下左右、対角線
	心理バランス	重心、緊張、遠近、集中、距離 中心の力、グリッド 安定、動的、静的



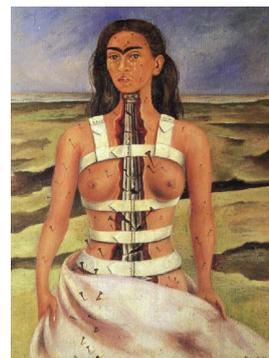
2. 肖像



レオナルド 1503 - 06



ゴヤ カルロス 4 世の家族



フリーダ・カーロ (Frida Kahlo)
1907-54 メキシコ

3. 自然主義

■自然主義

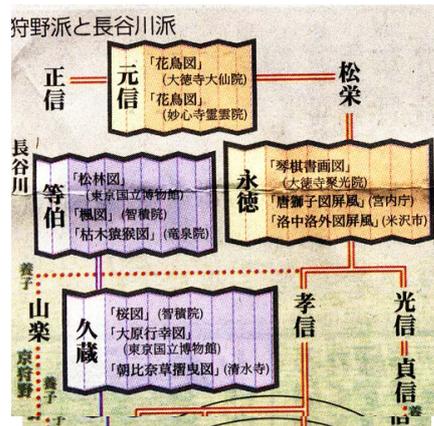
◆文芸面では

19世紀後半。理想化を排し人間の生の醜悪・瑣末（さまつ）な相までをも描出する。フランスのゾラ・モーパッサンなどが代表。この影響のもとに、日本では明治後期に島崎藤村・田山花袋など。

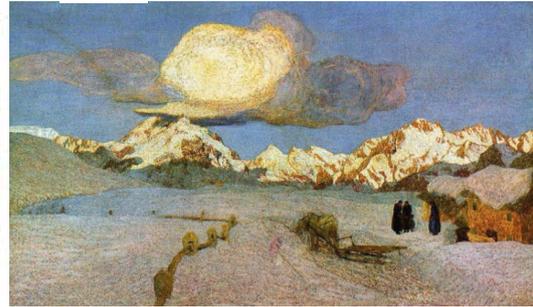
◆美術では

自然の事物を忠実に再現しようとする作画態度。

古典ギリシャの美術などにもみられるが、特に19世紀中頃のテオドール・ルソーらバルビゾン派や19世紀後半のクールベらの写実主義をさす



4. 象徴的表現



自然的象徴

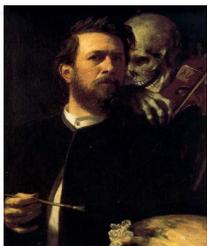
海 = 山 =
光 =

文化的象徴

十字架 = 魚 =
赤ワイン =

特殊
観念象徴
気分象徴

骸骨 =
青い鳥 =
風景画
象徴主義
抽象絵画 (一部)



4. 象徴主義

1880年代後半(フランス・ベルギー)
文学上の象徴主義と関連

- 反写実主義的な運動
＜アカデミズムに対する反発＞
(1) 印象派の傾向
(2) 象徴主義の傾向
- 神秘的な主題
宗教的・詩的な観念の表現

■ 代表的作家
ルドン、モロー、クリムト

人間の内面・夢・神秘性
象徴的に表現



シグナル(サイン)

直接行動をうながす
単一の意味

デザインの世界

記号(しるし・サイン)



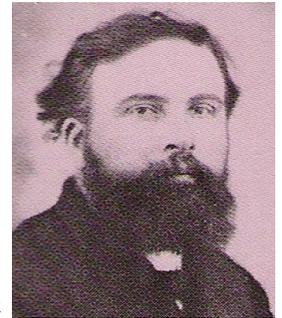
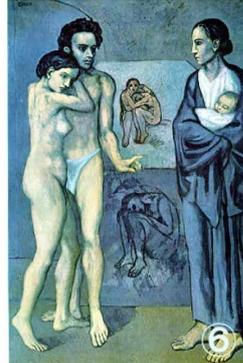
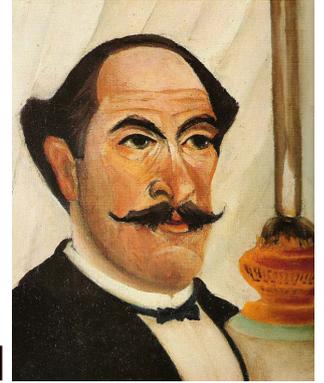
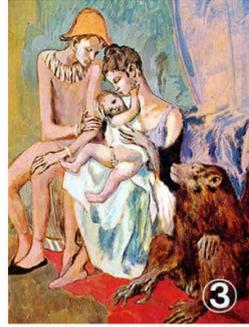
情緒的 シンボル

行動をひき起こさない
多様な意味
あいまい性

絵画の世界

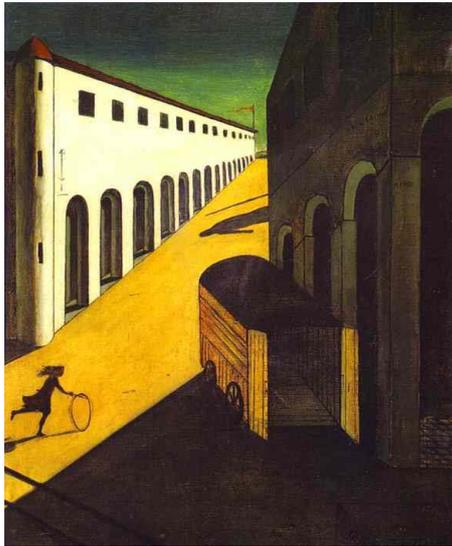
象徴

5. ヘタウマ



A

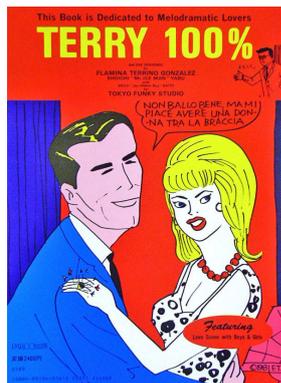
B 2



C

C 2

B 3



D

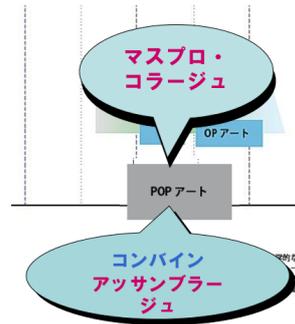
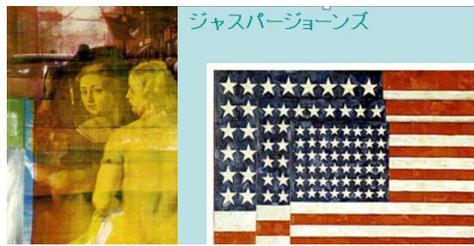
E

6. POPアートとは

1950年代	中	ブリティッシュPOP	ハミルトン ホックニー
	末	ネオダダ	ラウシェンバーグ J・ジョーンズ
1960年代		アメリカンPOP	ウォーホール リキテンシュタイン ローゼンクイスト ウェッセルマン オルデンバーグ
	末	ミニマルアート アースワーク	



ネオダダ 1950年代末のアメリカ
Rauschenberg - コンバイン



アメリカンPOP

看板 ローゼンクイスト

ヌード ウェッセルマン

漫画 リキテンスタイン

彫刻 オルデンバーグ

複製 ウォーホール

7. 抽象絵画とは

ステラは、現代の最重要作家

- 1、日本で一番意味？ の美術館 (VTR 7分)
- 2、抽象絵画の見方とは？
- 3、フランク・ステラ (VTR 9分)



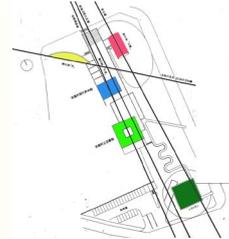
2、抽象絵画の見方とは？

「抽象」 意味の二面性

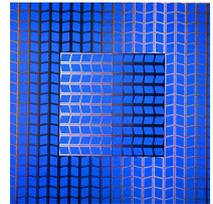
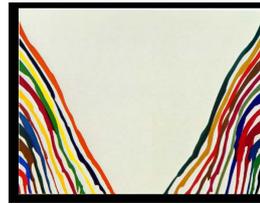
- ①はっきりわからない
- ②共通の要素をぬきだすこと



自然は、円、円錐、円柱に還元できる。



実験絵画 II 絵具の世界 II 抽象絵画



絵画の定義 (美学事典)

本質 : 三次元世界 → 二次元上に描写

課題 : 遠近法・陰影法・色彩を用いて
→ 平面上に現実世界の仮象

日常見ている抽象的な表現

何を..抽象絵画というのか？

抽象絵画 = 特殊な様式現象ダ

1824 今日から絵画は死んだ

リアリズム・印象派・世紀末芸術

19世紀末 描くべきものはもう無い

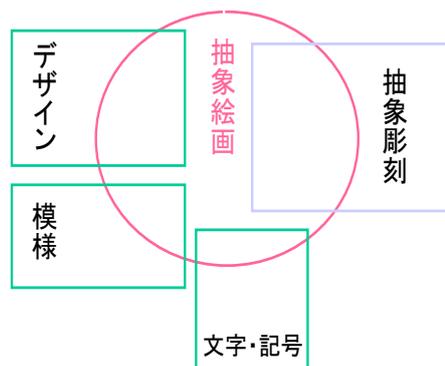
伝統的絵画の終焉

20世紀 実験絵画のスタート

キュビズム・フォービズム・抽象絵画.....



色や形を感じて楽しむ



「なんなのかわからない！」

<分ける=解る> 絵画を分解する

層構造による画面理解

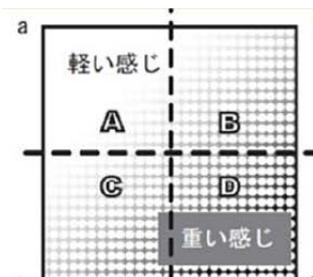
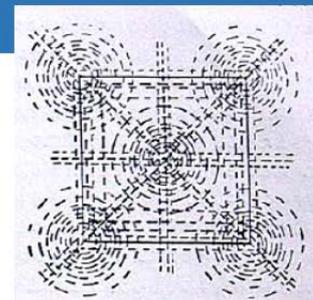


① 基礎平面とは？

見えない視覚的な力を理解する

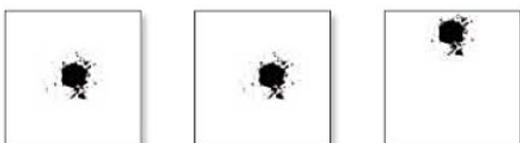
心理バランスの構造

- ① 中心の力 画面の中央には強い磁力がある
- ② 上下の相違 画面の上下は、重さの感覚が異なる
- ③ 左右問題 画面の左右は異なる性質をもつ
- ④ 対角線の心理 動きと安定の磁力をもつ
- ⑤ 辺と隅の緊張感 枠による力をもつ



アルンハイム 「中心の力」

中心は隠れた構造の一部である。



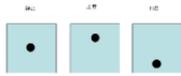
中心部は安定しやすい



上・下の重さ

『重さ』の概念は、具体的な重さとは一致せず、むしろ内部の力の表現、…内部の緊張の表現である

<上>、希薄、軽やかさ、解放、自由、上昇の感じを呼び覚ます
<下>は、稠密、重さ、束縛、下降、落下の感じを呼び覚ます



フォルムの感じ方の変化

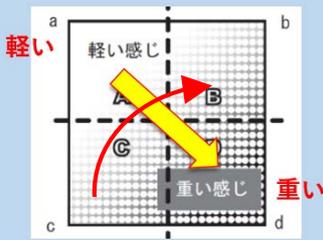
そういうわけで、上図の黒円のフォルム（要素）は、上昇するときは軽い感じに、下降するときしだいに重たい感じになるわけです。同じ正方形の枠に配置された黒円でありながら、右下に置かれたD図の円の方が「重く」感じられるでしょう。

左すみへの移動感



重さを感じる
右下へ移動感

遠い・深い

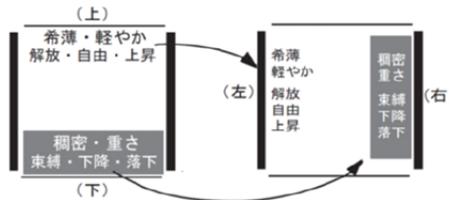


グランスカーブ

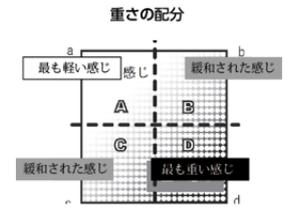
視空間の異方性

基礎平面の領域的特性として、画面の上部には、軽さ・上昇・解放・自由が、画面の下部には逆に重さ・濃密さ、束縛・重力といった一般的な感覚が生じます。

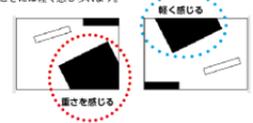
そして、左・右に関しては、それを反時計回りに90度回転させた感覚が生じます。したがって、上・下・左・右のそれぞれがもつ感覚を相乗させると【図5-1】のように、画面左上部 (A) は軽い感じ、画面右下部 (B) は重い感じとなります。



写真は、上を左にしませんか？



黒いベタ塗りの図形が、右下にあるときは重く感じられ、左上にあるときは軽く感じられます。



左上は、最も軽く感じる



重さを感じる
近く感じる

左・右は異なる性格をもつ

上・下において、重さの感覚が違って感じられるように、人間には左右に関しても違いがあるとされます。そのため、絵画の構図における左右の役割や性質の違いが指摘されています。

左の特性

希薄、
軽やかさ、
解放される
自由の感じ
遠方をめざす運動



右の特性

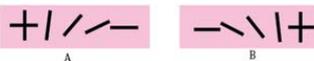
はっきりする
目立つ
重く感じる
束縛を求める
疲労が伴う
生氣を失う



フラ・アンジェリコ

アンジェリコの絵のように、西洋絵画では、左から右へ読ませる構図が多いのは、こうした左右の感覚的特性によるものでしょう。

視線は「左」から「右」への方向をもつ



A図、B図ともに、ほとんどの人は左から右へと視ることでしょう。人間の視線は左から右への方向をもっていると言われます。西洋絵画では古くからそうした心理を構図やモチーフ配置に活用してきました。

多くの場合、視線は「左上から右下」への方向をもつ



Thirteen rectangles
Wassily Kandinsky - 1930

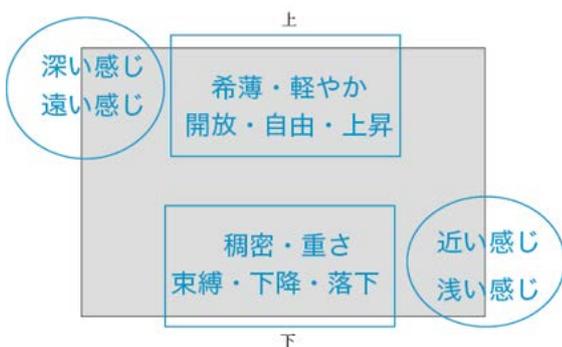


Harmony in Red
Henri Matisse - 1908



左辺に近いモノは右側へ動く感じがし、右辺あたりの置かれたモノは固定して見えます。アンジェリコの画面で確認してください。

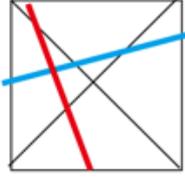
基礎平面の音色



対角線の安定感



「対角線」は画面の中心を通る45度の斜線で、水平・垂直に次いで、とても安定感があります。

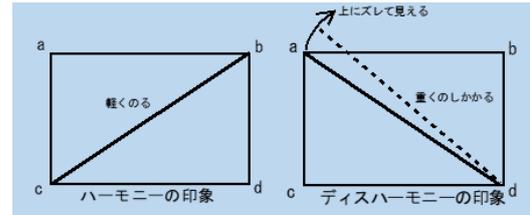


非対角線に配置された要素には不安定な感じが漂います。ただし放射状構図では焦点によりまとまり感が生じます。

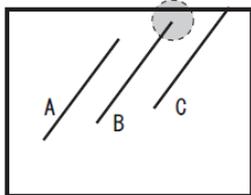
向きによる感じ方の違い



「キリスト昇架」(1610-1611年)



6. 辺への接近による緊張

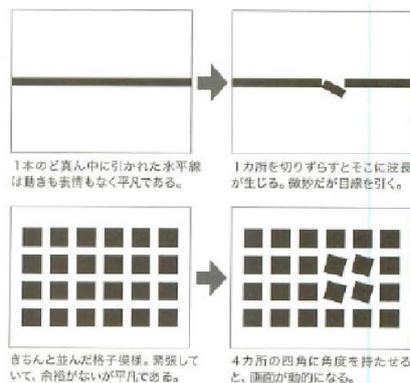
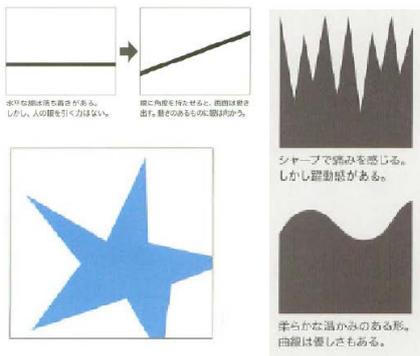


- A: 抒情的
- B: 上辺への緊張が加わる
- C: 接触により緊張解除

【図6】



絵画における緊張とは？



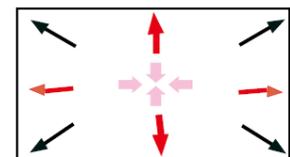
辺と隅の緊張感

画面枠による場の力

絵画の画面は、日常の景色を見るよりもはるかに狭い視野で、さらに平面(二次元)に限られています。そこでは4つの辺に囲まれた新しい「関係づけの枠」が作り出されています。それはさまざまな法則をもった、ひとつの世界が形成されていると見ることができます。

- ・4つの辺(縁)には、「辺」特有の力が生じる。
- ・タテ・ヨコ辺の力がぶつかる「隅」にも力が生じる。

「枠の力」は、「4つの辺」と「4つの隅(角)」とで組み立てられています。クレーによる左図は「辺」を、右図は「隅(角)」の力を活用しています。

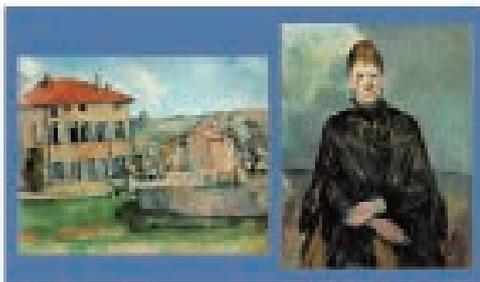


枠の力



クレー「金魚」

8. 見ること感じること



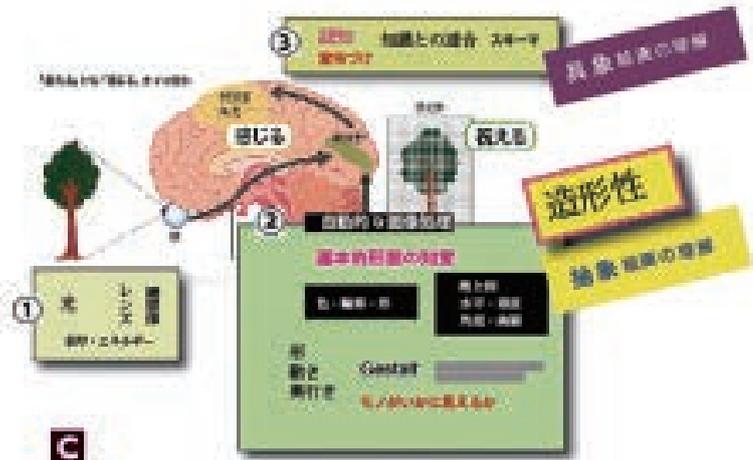
A



A.2

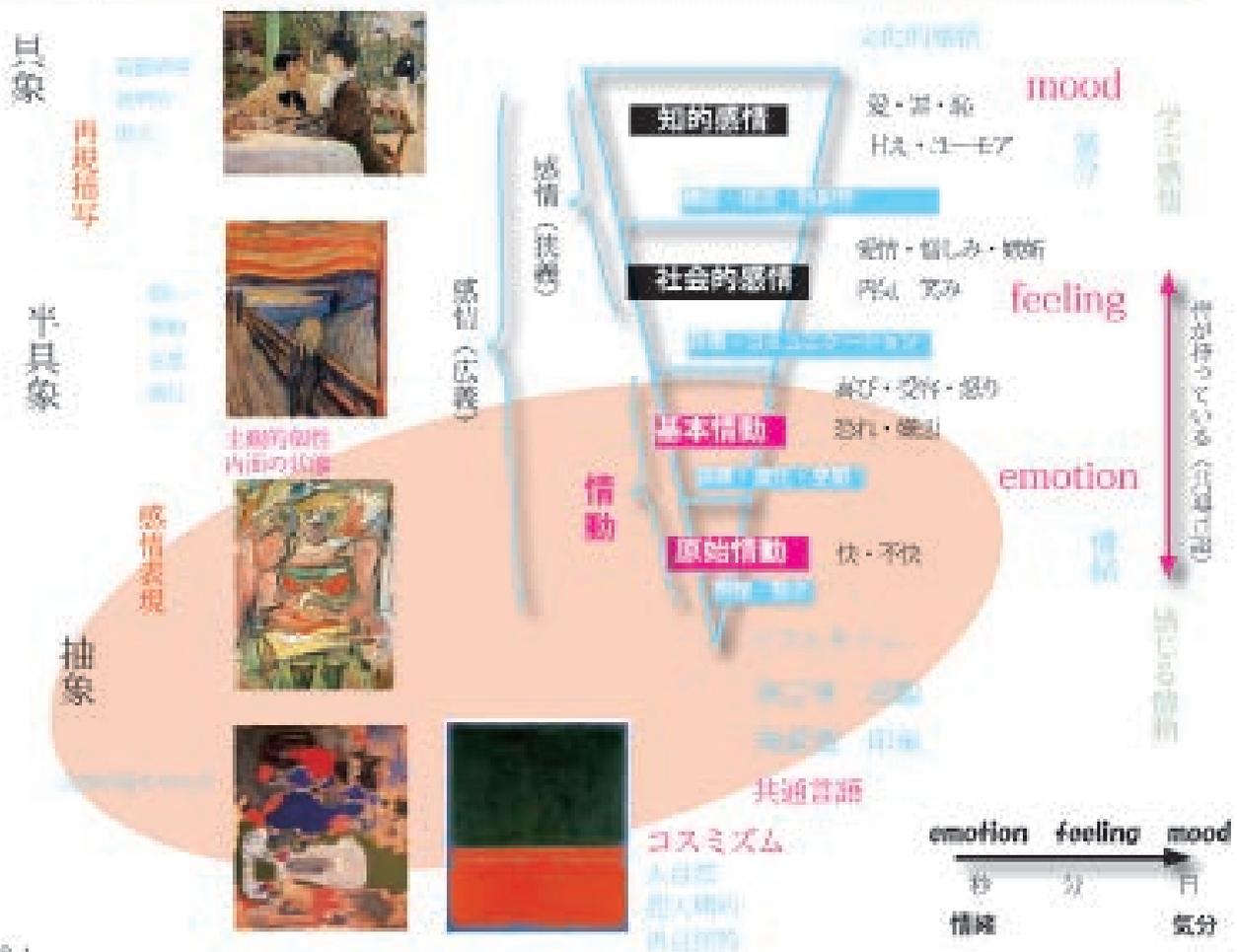


B



C

感情の四段階 (情動を理解する)



ホメオスタシス Homeostasis

(恒常性維持) (均衡状態への復帰) (刺激の軽減)

均衡状態 = 水平・垂直・中心

テンションは、快感の発生メカニズム

脳内では、快感物質ドーパミンやアモグリセリンが分泌されている。

全く変化がない状態では、神経の興奮が生じにくく快感も生じがたい。



緊張にテンションが生まれる



緊張の状態に対して自分の体内環境を「みるみる一瞬に崩れようとする」ような状態に陥らせないように努力してやることにより緊張は回復される

Homeostasis

周囲の変化に対して、自分の体を変える一定の範囲に保とうとする。その目的のための自発的な調節。無自覚・無意識

美的形式原理

- | | | | | |
|--------|----|-------------|--------------|-------|
| 独特 | 安定 | バランス | リズム | 重い・軽い |
| 規則・不規則 | | シンメトリー | リピテーション (反復) | |
| | | アンバランス | グラデーション | |
| | | コントラスト | 対比 | |
| | | プロポーション | | |
| | | ハーモニー | | |

<地>

基礎平面

異方性

心理バランスの構造地図

重さの配分

水平・垂直

- | | |
|-------|----|
| 上昇・下降 | 上下 |
| 引力 | 左右 |



<図>

図形

点
線

内部要素

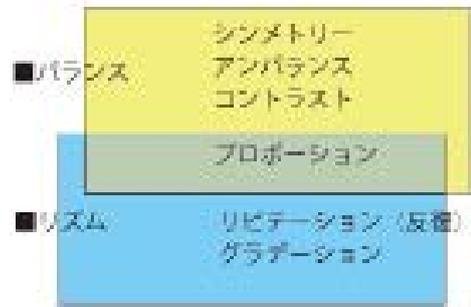
視覚的力動性 = 緊張体験

- | | |
|------|----|
| 方向動 | 運動 |
| 動き | 移動 |
| スピード | |
| 触感覚 | |

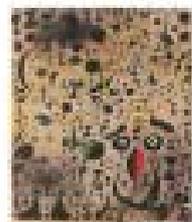
9. 造形性の基本

■ 実質上の概念では、ある対象の美しさをも左右する条件を体系的に見ていく場合、これを「美的形式論」という。通常それらは、**統一・調和・リズム・バランス・比例・プロポーション**などをさす。中でも「**多様における統一の原理**」はあらゆる形式法則の根拠をなすものとされる。この統一の原理は、美的対象が極限まで統一して内容がなごり軟弱多様でありながら全体として統一されていることを意味するものであり、これが美的前提条件といわれる。統一とは**秩序づけられた状態**である。現実材の空間的配列の仕方が均整ある場合に美しく感じられる。

造形性の基本



点による感情表現



「点」の多量な配置による緊張感と不安定感の表現。黒と赤のコントラストが強い。



点の配置によるリズムの表現。点の大きさや間隔を調整することでリズム感を生み出す。

点の配置による感情表現。点の配置によって緊張感や不安定感を表現する。

線による感情表現



線による感情表現。線の太さや色、方向によって緊張感や不安定感を表現する。



線の配置によるリズムの表現。線の太さや色、方向を調整することでリズム感を生み出す。

線の配置による感情表現。線の配置によって緊張感や不安定感を表現する。

リズム

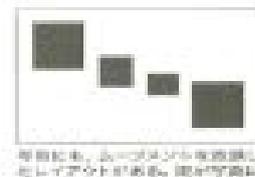


リズムの表現。形状や色を繰り返すことでリズム感を生み出す。



リズムの表現。点の配置によってリズム感を生み出す。

ムーブメント（動き）



ムーブメントの表現。形状や色を繰り返すことでリズム感を生み出す。



ムーブメントの表現。文字の配置によってリズム感を生み出す。

やさしさと冷たさ



やさしさと冷たさの表現。色や形状によって感情表現を行う。

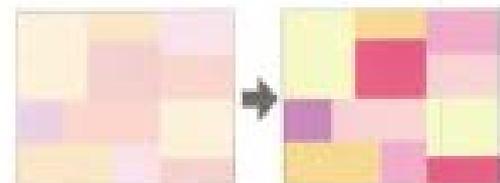


やさしさと冷たさの表現。色や形状によって感情表現を行う。



やさしさと冷たさの表現。色や形状によって感情表現を行う。

コントラスト（対比）



コントラストの表現。色や形状によって感情表現を行う。

コントラストの表現。色や形状によって感情表現を行う。

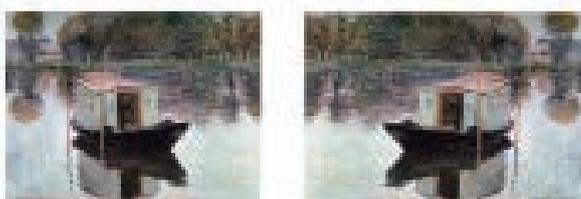
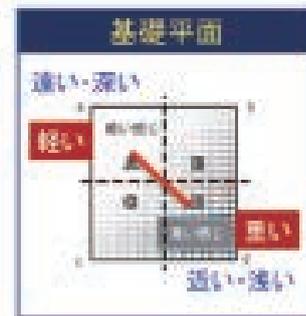
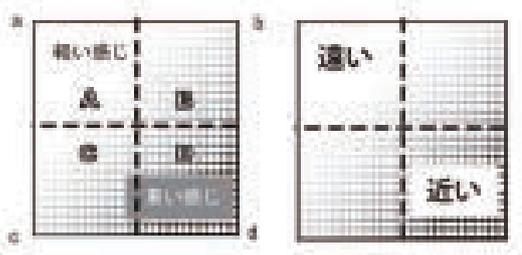
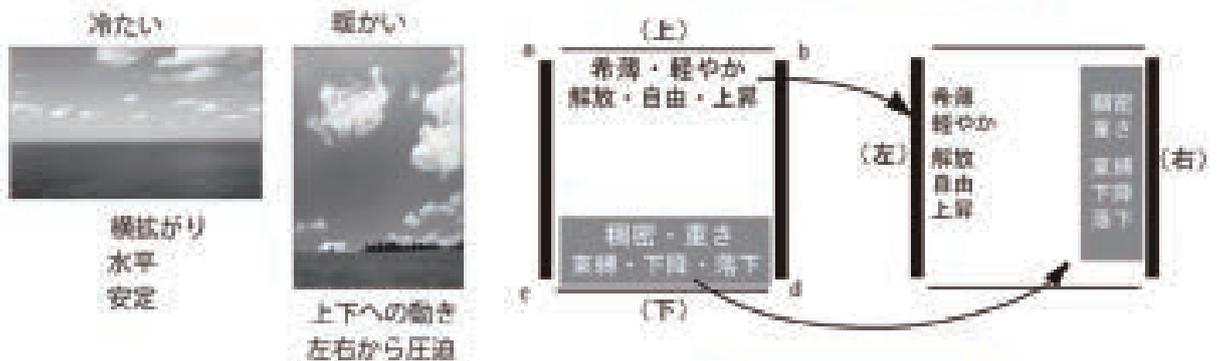
9-2 基礎平面（カンディンスキー）

■ 基礎平面はその基本的特性として、二組の水平・垂直線により四角形が取り囲まれていることから生じる冷感の感覚をもつ。**横長の長方形は冷たい性格**をもち**縦に長い長方形は暖かい性格**をもつとされる。これは水平線や空を見上げる日常的な生活感覚から生じるものであろう。縦横が異なるサイズだけで、作者がまったく関与しないうちから、独特の音色を与えることができる。とされる

■ 画面の上・下・左・右に関しては、さらに決定的な感覚・情動性をもつ。重さ・濃密さ、束縛・重力、あるいは逆に軽さ、上昇、解放、自由といった一般的な感覚が、基礎平面の各部において領域的特性として認められる。したがって、上・下・左・右のそれぞれがもつ感覚を相乗させると、画面**左上部（A）は軽い感じ**、画面**右下部（B）は重い感じ**となる。

異方性

- ・ 線画の角度は、たがひの鋭角角ではない
- ・ 画面は、均質ではない。上下・左右で異なる



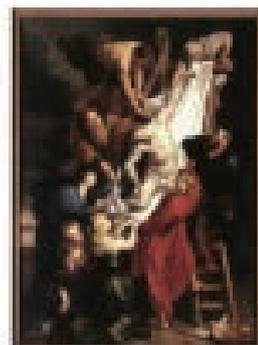
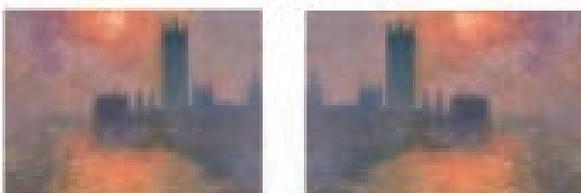
4. 画面の方向性と基礎平面の関係



軽い・軽快に向かう画面



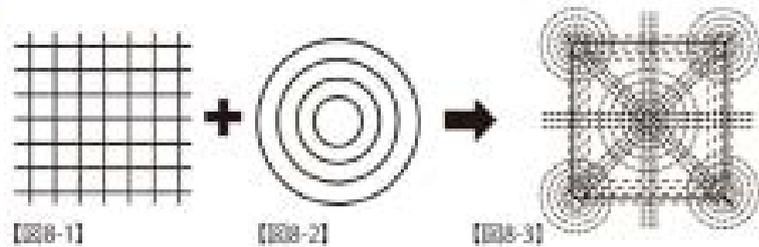
重しい・強固に向かう画面



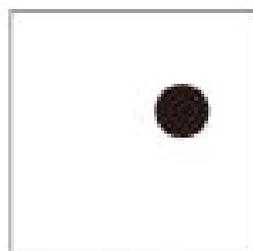
9-3 心理バランスの構造 (中心の力)

- 正方形のような視覚図形はうつろであると同時にうつろではない。中心は明確なかくれた構造の一部である。この構造は円板でさぐればわかる。円板がいちばん落ち着くのは、その中心が正方形の中心に一致する場合である。中心では全ての力はつりあっている。したがって安定しやうい。さらに、隅にも力がある。中心と隅は二つの磁石のようなものだ。

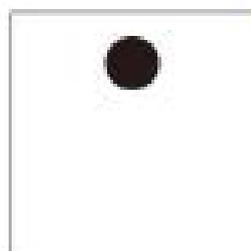
■ アルンハイムによる「心理バランスの構造図」は、感覚的な軸に沿った水平、垂直に斜線が加わったものと、この軸をグリッド化した正方形、および宇宙的な円の構図などの角度から成り立っている。



円形が基礎平面の中心にあるときには静止して感じる



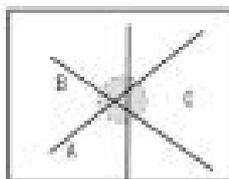
中心を外れた円形は不安定(中心に吸寄せられる)



円形が上方にあるときには上辺に引き寄せられて感じる



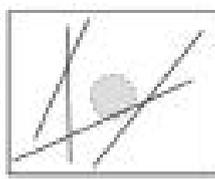
「いくつかの円」カンディンスキー



感情的な響き



「私と君」シャガール

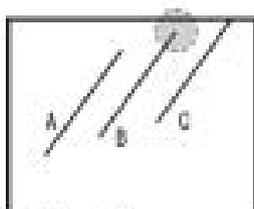


ドラマチックな響き



「黄色の叫び」カンディンスキー

辺を持つ、緊張誘発力



A: 抒情的
B: 上辺への緊張が加わる
C: 接触により緊張解除



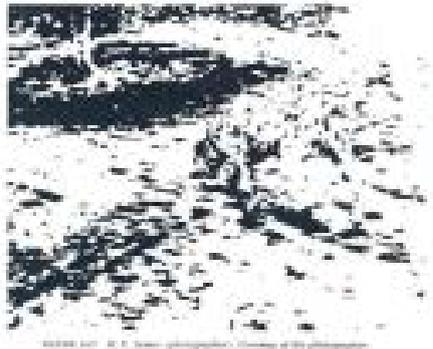
「スルパン」

均衡状態への復帰の原理



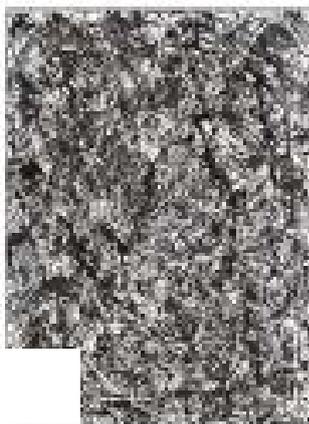
9-4 地と図の性質（ゲシュタルト心理学）

- 画面に描かれるものには、主体となるものと、サブ的な背景になるものがある。一般的に**主体になるものが知覚され**、背景はそれほど意識されない。「主体と背景」の関係は、ルビン[Rubin]によって提唱されたゲシュタルト心理学の「**地と図**」にあたる。ルビンは、**図形に相当する領域が「図」となり、それ以外の領域が「地」**になっていると定義した。



図は	地は
②輪郭を持つ	輪郭をこえて広がる
③手前に浮き出る	背景で広がる
④モノとして感じる	漠然と感じる
⑤固く引き締まった	空虚でやわらかい感じ

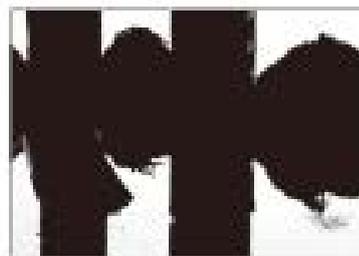
- (1) 図となった領域は形をもつが、地は形の印象を伴わない
- (2) 共通の境目に生じる輪郭は図に帰属して知覚される
- (3) 地は図の輪郭の背後にまで広がって感じられる
- (4) 図は物の性格を有し、地は形状のない素材の性格をもつ
- (5) 図はより豊かで個性的
- (6) 図は色が強く白色、密で定位が確定的
- (7) 図は前面、地はその後方にひっこんで見えがちである
- (8) 図は地よりも印象的で意味を担いがちで一層記憶されやすい



- ボロック
ドリップングによる画面を覆い尽くした表現は、地と図の区別が判然としない代表的な事例である。オールオーバーと呼ばれるこうした表現は、焦点の意識を感じさせず中心を持たない



- マチュー
マチューの画面には明らかな「地」が存在し、そのことによってタッチが随時に鑑賞者の眼に捉えられ、ダイナミックな律動感を感じさせている。



- マザウエル
通常は、分量が広い方が「地」として感じられ、明るい面の方が「図」として意識される。



- スティール
地と図の関係を曖昧に提示した事例である。もともと黒色が持つ象徴性は鑑賞者の心理に不安を生じさせる。色彩の拮抗と地と図の不安定な関係性による効果を活用した画面であるといえる。

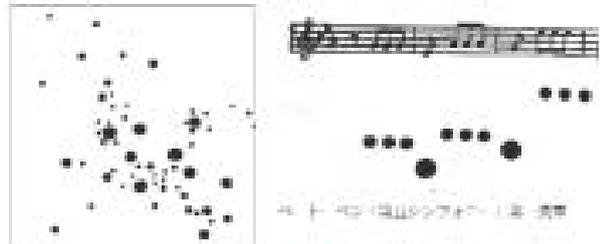
9-5 点・線の性質 (カンディンスキー)

■ 「**面**」は、人の手によって描かれた画面の表面に見るもの、すなわち**点**、**線**、**形**、**方向**、**明暗**、**色**、**テクスチャ**、**奥行き**、**大きさ**、**運動**である。

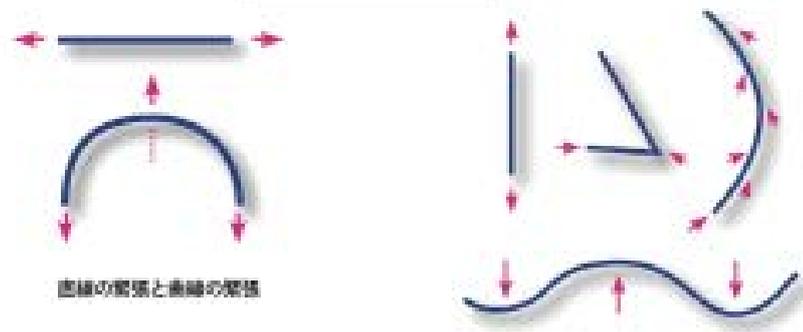
■ カンディンスキーの「**音楽の理論**」は、すべての要素が**二面**になっていて、**外在性**=目に見えるモノと、**内在性**=見えないモノ(一定の**情緒性**)を同時に備えているとする。

■ 「**点**」は、もっとも簡単な形態・冥想・沈黙を意味し、その位置によって豁然と自己を主張し、水平・垂直のいかなる方向に対しても動く気配すら示さない。内面的理解として、点は基礎平面に噴き込んで永遠に自己を主張しつづける「**求心的緊張**」の性質をもつ要素であると要約できる。

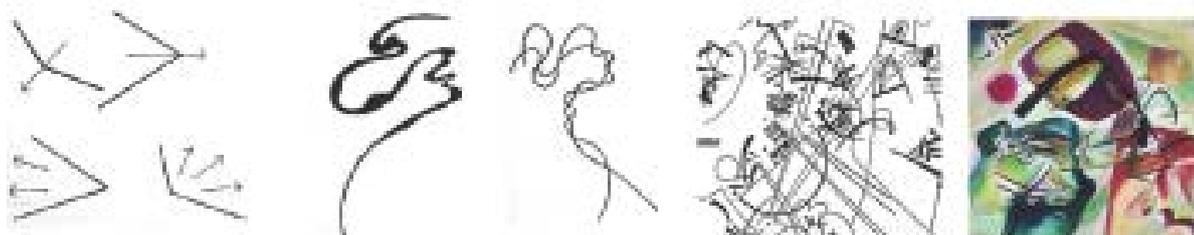
(注し、情動の点の例には、引力が加わる)



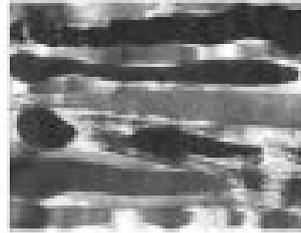
■ 「**線**」は、点が内蔵している完全な静止を破壊し、動的なものから動的なものへの用臨があるとし、カンディンスキーは「点・線・面」の中で、直線、曲線、折線、およびその変動に関し、およそ考え得るかぎりの線を探り上げ、それに対して多様な変動と変形を加えて詳細な検討を行った。



	線に関する分析 (カンディンスキー『点・線・面』より)	ページ
水平 垂直 対角線	水平線は無限の滑たい運動性を表す最も簡単な形態(基礎)。	61
	垂直線は無限の鋭い運動性を表す最も簡単な形態。	61
	対角線は、冲と緩とを含む、無限の運動性を表す最も簡単な形態。	62
	斜公式的な直線以外の直線は、平面に適合密着していない感じを与える。	64
	正方形の中心を通る水平線と垂直線による構成は、力強い根源的な響きを生じ、コンポジションの原型である	69
直線 曲線	直線は、明確で単純な2つの緊張を持つ(第一・第二の緊張)	
	直線は平面の完全な否定(方向のみをもつ動的広がりをもたない)	65
	曲線は、平面へと展開する線を包摂している	66
	直線は、線である。(円が平面であるのに対して)	66
	曲線にとり主役となる緊張は、圓に閉入している(第三の緊張)	67
	直線は円の緊張を均質している	68
	圓には円閉したエネルギーが溜まっている	61
	アクセントが高じてゆく直線は緊張度が高められる	61
短い直線の肥大は、点が肥大する場合と類似の意味をもつ	66	
角度 ほか	滑らかな、ギザギザした、凸凹した等の性質は、必ず観念の空間に属する種の動感をも呼び覚ます	65
	直角は、最も滑たい感じの角、直線に、冷靜さと秩序の原則。	67
	鋭角は、最も緊張感があり、最も鋭い感じの角でもある。尖鋭さと極度の運動性。	75
	鈍角は、直線と垂直に近、運動、無力感	75
	鈍角は、角度が増大してゆく程、そこにできる形態は円に近づこうとする傾向がでてくる	75
	時間的要素は、点より線にはるかに認められる(長さはずでに時間規定なのだから)	65



筋肉や関節をうごかす物理的な力＝運動感覚によるものではなく、刺激によって大脳に起こされた**感覚神経による知覚的な力**による、すべての人間に共通な基本的な視知覚系であり、そのことによって「**普遍性**」を備えているといえる。



軸 振かれた形には、**軸**ができる
軸には**方向のある力**ができる
視覚対象は**主軸の方向に動くことを好む**
形の軸はふたつの反対方向への運動を生ずる。
ひとつがいろいろの理由で選ばれる



引力・動き

- ・モノとモノとの**相関は力動的**である
- ・小さい形（モノ）の方が動く
- ・そばに振かれたモノの方に引かざる相関がある



傾斜

- ・斜め位置は、強い力動的な効果を生み出す
- ・左上から右下への斜角線は**上昇的**（ペルファリン）
- ・右上から左下への斜角線は**下降的**（ペルファリン）
- ・斜線が方向のある緊張を生ずるのは止むを得ないから
- ・斜め方向位置は方向のある緊張をつくりだす最も有効な手段であろう



滲み・ボカシ 東洋的表現にみる律動性

- 毛筆や水墨画に馴しんだ日本人にとっては「**滲み**」がもたらす感応を特殊なものとは感じない。ところが西洋画にあっては、その長い歴史の中でも滲みを用いた表現はほとんど見られず、西洋人にとっての滲みは汚れに近いものであった。滲みやボカシの効果は西洋絵画の表現の手法として受け入れられるようになったのは、大戦後に水墨等の日本の絵画の影響を受けたサム・フランシスやルイスによるカラーフィールドやペインティングからである。



フォートリスのマジニール



アルガンダ

触感覚

- フォートリスの、軽つぶされた絵具のマジニールからは、当時のヨーロッパの戦士の状況や時代性が込められている。アルゲンダの縦状な筆まきからは、書作者自身が筆で描いているような疑似感覚が与えられる。

9-7 動き・スピード



暗い方が動き、
明るい方は静止する

ぼやけて薄くなっているものは動きを感じさせる
(車輪・旗・胸・脚)



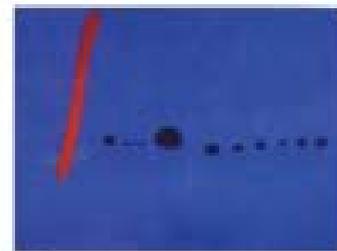
アランケンサーワ



アランケンサーワ



ロスコ (高橋)



三浦

9 造形用語の分類

造形事典にもある造形技術の要約

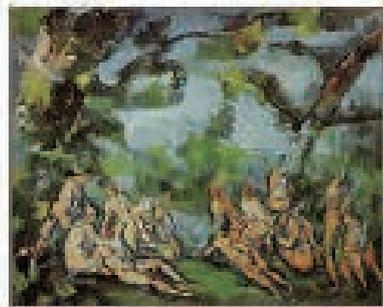
竹内敏雄 美術 1974 元文堂	点 色 線 形 空間	マッセ 造形法 素描 マティエール メティエ
------------------	------------------------	------------------------------------

フランス [BOUILLON]	構造的コネクション	コンポジション	構造的技法
円は88 円角角語の構造と分割	点 線 形 方法 素描 色 テクスチャ 大きさ	バランス 緊張 平面化 尖鋭化 偏角 導引 階化 個性 個性	バランス アンバランス 対照 非対照 確固 大胆 規則 不規則 中立 強調 簡潔 複雑 透明 不透明 統一 分離 蓄 変化 静的 動的 正確 歪曲 予測 偶発 単純 進行 活動 受動 系列 並列 連続 完結

フランス [BOUILLON]	エレメント	造形文法
「芸術デザインの手順構成」 1984	点 線 面 立体 空間	配置 分割 形状分割 等量分割 スタイル式 相似形分割 自由分割 比例 黄金比 ルート平方根 数値 対比 シンメトリ 平行移動 既知 未知 導引 バランス コントラスト ユニティ 重複 二重性 無様性 立体感 透明感 ムーブメント リズム 音律

作品分析 サンプル (1)

Report Sample



手ぐさ事
 本作品は、1897年にパピエタによって描かれた、南太平洋の島嶼を背景とした作品である。画面には、赤いシャツを着た男性と、青いドレスを着た女性が描かれている。背景には、熱帯の風景と、飛行する鳥が描かれている。この作品は、パピエタの南太平洋への探検旅行の経験に基づいて描かれたものである。画面の構成は、人物の配置と背景の風景の対比によって、視覚的な緊張感を生み出している。

「手ぐさ事」(1897年、パピエタ)

図像
 この作品は、南太平洋の島嶼を背景としたものである。画面には、赤いシャツを着た男性と、青いドレスを着た女性が描かれている。背景には、熱帯の風景と、飛行する鳥が描かれている。この作品は、パピエタの南太平洋への探検旅行の経験に基づいて描かれたものである。画面の構成は、人物の配置と背景の風景の対比によって、視覚的な緊張感を生み出している。

画面構成 (ディスプレイ)
 この作品は、南太平洋の島嶼を背景としたものである。画面には、赤いシャツを着た男性と、青いドレスを着た女性が描かれている。背景には、熱帯の風景と、飛行する鳥が描かれている。この作品は、パピエタの南太平洋への探検旅行の経験に基づいて描かれたものである。画面の構成は、人物の配置と背景の風景の対比によって、視覚的な緊張感を生み出している。

この作品は、南太平洋の島嶼を背景としたものである。画面には、赤いシャツを着た男性と、青いドレスを着た女性が描かれている。背景には、熱帯の風景と、飛行する鳥が描かれている。この作品は、パピエタの南太平洋への探検旅行の経験に基づいて描かれたものである。画面の構成は、人物の配置と背景の風景の対比によって、視覚的な緊張感を生み出している。

分析 (作家の目的) 分析 (図像) 分析 (手ぐさ事) 画面分析 (全体的)

この作品は、南太平洋の島嶼を背景としたものである。画面には、赤いシャツを着た男性と、青いドレスを着た女性が描かれている。背景には、熱帯の風景と、飛行する鳥が描かれている。この作品は、パピエタの南太平洋への探検旅行の経験に基づいて描かれたものである。画面の構成は、人物の配置と背景の風景の対比によって、視覚的な緊張感を生み出している。

解説 分析 (作家の目的)

この作品は、南太平洋の島嶼を背景としたものである。画面には、赤いシャツを着た男性と、青いドレスを着た女性が描かれている。背景には、熱帯の風景と、飛行する鳥が描かれている。この作品は、パピエタの南太平洋への探検旅行の経験に基づいて描かれたものである。画面の構成は、人物の配置と背景の風景の対比によって、視覚的な緊張感を生み出している。



この作品は、プラトンのアカデメイアの理想郷を表現している。プラトンのアカデメイアは、理想郷を表現している。プラトンのアカデメイアは、理想郷を表現している。

プラトンのアカデメイアは、理想郷を表現している。プラトンのアカデメイアは、理想郷を表現している。プラトンのアカデメイアは、理想郷を表現している。

プラトンのアカデメイアは、理想郷を表現している。プラトンのアカデメイアは、理想郷を表現している。プラトンのアカデメイアは、理想郷を表現している。

プラトンのアカデメイアは、理想郷を表現している。プラトンのアカデメイアは、理想郷を表現している。プラトンのアカデメイアは、理想郷を表現している。

プラトンのアカデメイアは、理想郷を表現している。プラトンのアカデメイアは、理想郷を表現している。プラトンのアカデメイアは、理想郷を表現している。

「ニル・ケレ」

「ニル・ケレ」

この作品は、プラトンのアカデメイアの理想郷を表現している。プラトンのアカデメイアは、理想郷を表現している。プラトンのアカデメイアは、理想郷を表現している。

プラトンのアカデメイアは、理想郷を表現している。プラトンのアカデメイアは、理想郷を表現している。プラトンのアカデメイアは、理想郷を表現している。

プラトンのアカデメイアは、理想郷を表現している。プラトンのアカデメイアは、理想郷を表現している。プラトンのアカデメイアは、理想郷を表現している。

プラトンのアカデメイアは、理想郷を表現している。プラトンのアカデメイアは、理想郷を表現している。プラトンのアカデメイアは、理想郷を表現している。



【図 1】

<分析事例1>【例1】

『On White II』カンディンスキー (1923)

一見ごちゃごちゃとした色の塊に見えるが、少し冷静に見ると、線や色面で構成されていることがわかる。最初に日が行くのは、直角に重なる2本の黒い線だろう。ひとつは画面左上からだんだんとはねて右下へ下降し、もうひとつは画面左上から右上へずっと上昇していく。動きのある2つの線が、ちょうど画面を対角線状に分けているように見える。

しかし、ここで気になるのが、正対角線上に配置していないところだ。角をわずかに避けていることがわかる。この微妙な変化は、ホメオスタシスの効果が出ていると見て間違いないだろう。「対角線が垂直水平線からごくわずかもズレていることが、抽象芸術において極めて希疎、基礎平面上の個々の形態が持つ全ての緊張は、そのズレに応じて、その態度変化と通った色面を耕す」と彼自身が言っている。

次に色面のことについて書きたい。線の黒、灰色の黒、赤、水色、橙、紫に日が行きやすいが、この絵を支えている土台は、少し透けた黒の色面だ。画面の真ん中に配置していることで、重なる他の構成物をばらつかせないようにト支えをしている。黒い線の対角線の交点が色面と重なっていることも大きいだろう。敢てこまごまとした要素が自由な動きをしているも、ちぐはぐな印象を持つことはなく、安心して視線を動かすことができる。

最後に再びカンディンスキーの言葉を借りたい。「基礎平面の中心近くに無定形な形態は、構成に抒情的な響きを与える」と言っている。抒情的、つまり感情的、有機的、ということになる。しかしこの絵の要素だけを見ると、無機的な線と色面だ。おそらくカンディンスキーは、線と色面という無機的な要素を、配置や構成によって、いかに有機的に見せるかを、両面の中で探求していたのかもしれない。

<分析事例2>【例2】

『神酒』モーリス・ルイス M.Louis(1958)

ふわふわと浮かぶような、それでいて安定感のある不思議な感覚にさせられる絵画だ。重さが上にあることで、視線が上へ引かれる。上に行くにつれて太くなる色帯が、キャンパスの端ぎりぎりまでピタッと止まっている。端に接する訳でなく、微妙な隙間をあけることで画面に緊張感が生まれている。

色帯は横長の画面に対し、縦に配置されており、垂直的要素があるが、下部の中央に向かっての緩やかな傾斜があるため、あまり重さを感じさせない。この作品をぱっと見た際に、左右にあいた三角形の空間や中心の垂直に近い白い地の線から、一見左右対称の構成に見える。しかし細かい部分を見ていくと中心が微妙にずれていたり、左右の色帯の数や見える地の面積の違いなどが目に入り、均整状態への期待がなされ、瞬間にテンションが生まれる。ホメオスタシスの効果によって、絵画が揺れ動くような心地よい動感を感じる。また、下にいくにつれて細くなるという線の強弱によっても動感が生まれているのではないが、なだらかなゆっくとした動きを感じる。ルイスの絵の魅力の一つは制約なのだろう。人為的な雰囲気を感じさせず、どこかやさしい曲線を感じる。絵具を流すことによってできた自然の曲線によって、やわらかな優かみを感じることができる。



【図 2】